



# 近世の兵庫津を基盤とするまちの解体と再構成についての考察

陳, 鍼

山崎, 寿一

山口, 秀文

---

## (Citation)

神戸大学大学院工学研究科・システム情報学研究科紀要, 13:2-11

## (Issue Date)

2021

## (Resource Type)

departmental bulletin paper

## (Version)

Version of Record

## (JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013420>

## (URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013420>



# 近世の兵庫津を基盤とするまちの解体と再構成についての考察

陳 鍼<sup>1\*</sup>・山崎 寿一<sup>2</sup>・山口 秀文<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 工学研究科建築学専攻

<sup>2</sup> 工学研究科

<sup>3</sup> 工学研究科

キーワード： 領域史、兵庫津、まちの構成モデル、兵庫運河周辺地域

現在の兵庫運河周辺地域では、江戸時代の兵庫津を基盤とし、近世の原型が近代の都市整備と戦災復興計画事業によって空間再編され、近世・近代・現代という重なり合う3つの時代の空間・時間的文脈が受け継がれている。本研究は、兵庫運河周辺地域の空間構成を理解するために、領域的視点から、考古学と都市形成史の既往研究を踏まえ、兵庫のまちの解体・再構成の過程を着目し、境界・軸・中心核という空間構成の要素を捉え、近世から現在に至るまでの段階的変遷を考察する。それにより、兵庫のまちの時代区分、各年代の構成モデルと現在兵庫運河周辺地域の構成モデルの変化とその特徴を明らかにする。

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景と目的

兵庫のまち<sup>注1)</sup>は、江戸時代には「兵庫津」<sup>注2)</sup>と呼ばれ、海陸交通の拠点的な近世都市であった。明治以降の兵庫は、都市の中心機能の東へ移転に伴い、兵庫港と神戸港はその地位が逆転していく(図1)。近年、神戸開港150周年の機運に、地域が有する魅力を現代神戸に継承する構想に関して高まりを見せている<sup>注3)</sup>。

本稿は、兵庫運河周辺地域を対象とし、地域活性化のために、まちづくりの方向性やまちの将来像を考える上で、兵庫のまちの解体・再構成に着目して、近世から現代まで、まちの構成モデルとその特徴を明らかにしたい。

### 1.2 先行研究と既往研究

建築史・都市史分野の伊藤毅の「都市史から領域史へ」<sup>注4)</sup>には、「領域」的視点から、地域で積み重ねられた建築、山林、水系、まちなどを含む空間の全体を同時に見る視点から都市空間を見直している。

都市計画分野の佐藤滋の「現代に生きるまち 東京のまちの過去・未来を読み取る」<sup>注5)</sup>では、江戸時代から一貫して都市基盤の整備が蓄積された都市建設の歴史を解きほぐすことより理解され、計画論と歴史研究を結び付けることがまちづくりにとって重要な課題性を示唆している。

本研究で対象とする兵庫運河周辺地域について、まず、1998年から2017年までの埋蔵文化財発掘調査<sup>注6)</sup>の考古学の研究がある。その中で明らかにされている江戸時代の都市復元図は本研究での貴重な資料となっている。

中江研ら<sup>注7)</sup>は、明治期から昭和期にかけて兵庫突堤の着工とともに、和田岬周辺の近代産業の形成過程を考察し、和田岬地区の市街地形成を調査した。足立裕司ら<sup>注8)</sup>は、兵庫港とその周辺地区を対象とし、明治初期の都市構成の主な街路・施設などの要素の変化を追い、兵庫から神戸への都心移動を論じていた。吉原大志<sup>注9)</sup>は兵庫運河の開削に着目して「兵庫」を中心とした近現代史の基礎的研究を行った。港湾都市の兵庫津から兵庫運河を核とした都市構成の経緯を明らかにした。

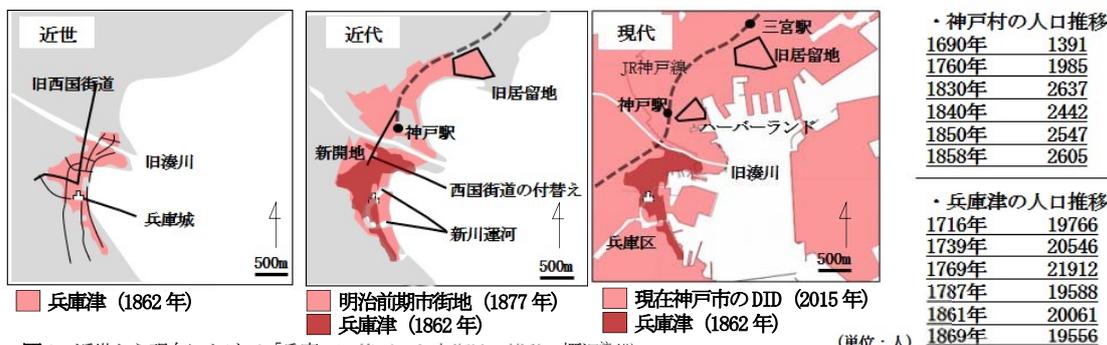


図1 近世から現在にかけて「兵庫」に基づいた市街地の推移の概況<sup>注10)</sup>  
(兵庫津遺跡の範囲<sup>注11)</sup>と「元禄兵庫復元図」、明治10年神戸市実測図、2015年の神戸市DID<sup>注12)</sup>分布図の情報をもとに作成)

本研究は、兵庫津及び兵庫地域に関する既往研究を踏まえた上で、近世から近代への変化を「断絶」ではなく「連続」したものと捉え、近世以後の兵庫の領域的視点での構成とその変化に着目し、各時代に積み重ねられた都市建設の歴史とまちの構成モデルを分析・考察していく点、それらから現代のまちづくりに対する知見を得ようとする点に本研究の独自性があると考え。また、地域の形成過程と文脈を読み取り、それを現代のまちづくりに活かす点に計画論的意義がある。

### 1.3 課題設定と研究方法

地域の活性化のために、地域の歴史的な文脈という抽象的なものを、物的空間の解説に結びつけ、地域の固有性に立脚した空間デザインや現代的まちづくりのための基礎情報とし、まちの構成モデルを明らかにしようとするものである。現代へとつながる残された歴史的な文脈は、建築などの点的存在ではなく、兵庫津を基盤とした対象地域全体の広がりのある空間と時間軸の中で捉えられることにより、都市空間の読み取りや現代のまちづくりの中で活かされる。そのため、現在の兵庫運河周辺地域において、実現に向けたまちづくりの構築に対し、兵庫のまちを捉える領域的視点・方法の関心が必要であると考え。

以上の問題意識と既往研究を踏まえ、研究目的を達成するために以下の3つの課題を設定して研究を進める。

1) 江戸時代の兵庫のまちの構成を読み解き、明治期の都市建設の影響を受ける前の原型的構成モデルを明らかにする。

2) 領域的視点から、兵庫津を基盤とするまちの解体・再構成の過程を分析・考察するとともに、兵庫のまちとしての領域と時代区分を明らかにする。

3) 現在の兵庫運河周辺地域において、江戸時代から現代のまちの構成モデルの変化とその特徴を明らかにする。

上記の課題を明らかにするため、古地図(図2)<sup>注13)</sup>、近代実測図<sup>注14)</sup>、最新の考古学発掘調査、「新修神戸市史」<sup>注15)</sup>を整理し、以下のプロセスに従って進める。

1) 神戸市文書館と神戸市立博物館で史資料の確認ができる幕末期までを考察の対象とする。表1では、兵庫津に関わる古地図・絵図などの史資料を収集し、そのタイトル、発行年代、種類、縮尺、掲載文献・所蔵先、発行元、表記範囲をあげて、それぞれの項目を整理し、その中に読み取られた情報をリスト化したものである。

2) 古地図から読み取る情報を踏まえ、兵庫津発掘調査報告書(以下「報告書」と記す)の復元図<sup>注6)</sup>と現在の神戸市地図<sup>注16)</sup>、CADソフトを用い、近世基盤としてのまちの構成モデルを把握する。

3) 既往研究を踏まえ、変化するまちの領域においてまちの中心、軸、境界などの要素を抽出し、まちの領域的構成が変ってきた過程とその特徴を読み解く。

4) 領域的視点から、近世・江戸時代から近代、現在までの変容(解体・再構成)を明らかにし、兵庫のまちの時代区分を設定する。

5) 各年代が積み重ねられた地域の特徴を空間的に解説し、まちの構成モデルを考察・分析し、各時代及び現在の兵庫運河周辺地域の変化とその特徴を明らかにする。

## 2. 兵庫津を基盤とするまちの原型

### 2.1 江戸前期から後期までの変化

#### 1) 江戸時代前期の城下町構成

江戸前期(1603年～1715年)から江戸後期(1716年～1867年)までの兵庫津は、港町として、また西国街道の宿場町として栄えるが、天正9(1581)年に池田恒興による兵庫津の支配で、兵庫城を築き、城下町の整備が行われていた<sup>注6)</sup>。

元禄9(1696)年撰州八部郡福原庄兵庫津絵図(図2の①、以下「元禄図」と記す)<sup>注13)</sup>から、江戸前期の兵庫について、町人地の軸性と城郭の関係についての「城下町プラン」<sup>注17)</sup>の視点を加え、①境界、②中心、③軸に関する以下の特徴が読み取れる。

①境界：城下町の城郭の位置と身分に基づく居住区分から見ると、兵庫津は「総郭型」(城下町全体を惣構で囲う)の構造である。しかし、都市全体が堀に囲まれる構造ではなく、1696年頃の兵庫津では、都賀堤(語源は外側「そとがわ」の堤と称したものを略して「とが堤」という堤防・堀が都市の外郭とする構成である。南部は須佐入江などの水域により境界が形作られている。

②中心：兵庫津遺跡調査の元禄期復元図<sup>注6)</sup>により、武家地は内堀うちに兵庫城の敷地だけである。元禄期のまちの中心部(岡方)は、勤番所(旧兵庫城)を核とし、その外部には町人地と寺社地が混在している状態である。

③軸：兵庫津に向かう主要な街道筋と街路形態の関係から、1696年時点の兵庫津は西国街道を軸とする「縦町・横町」<sup>注18)</sup>に基づいた町人地の空間構成が見られる。

#### 2) 江戸時代後期の海岸部への拡張

江戸時代後期に作成された兵庫津絵図(図2中の②嘉永図と③文久図、表1)をみると、北浜海岸部及び湊川右・左岸部において大規模の市街地開発が行われたことが確認できる。

1696年頃の元禄図と比較すると、佐比江(文久図)が埋め立てられ、新たに町として加わり、東出町・西出町・湊町一帯が連続した町となっていることがわかる。

また、高久智広の「近世兵庫津の都市空間」に関する既往研究<sup>注19)</sup>を踏まえ、1860年頃の北浜・南浜において、漁業や造船、網干場といういくつかの都市機能の細分化が見られる。つまり、江戸時代後期の海岸部は、西出町・東出町・川崎町を中心とし、海運・商業・造船・漁業など複合的な機能をもつ港湾地区になったと考えることができる。

一方、城に向かう主要な街道筋と「横町・縦町」に基づいた空間構成の関係と、「境界(堤、水域)・軸(西国街道)・中心核(城)」という基本構成は変わっていない。

### 2.2 近世・江戸後期(1862年頃)のまちの原型的構成モデル

ここでは、第42・52次「報告書」による「元禄兵庫津復元図」をベースに、1862年頃のまちの構成を考察する。

前節で述べたように、江戸時代前期から後期へは城下町の特徴が受け継がれており、1862年頃まちの構成モデルを図3に示すように、以下の点を整理した。

①境界：まちの西側には、外輪堤と須佐入江の水域の環境によって元禄期の境界が継承されている。一方、まちの北側には、江戸時代後期の湊川周辺と北浜海岸部の市街地

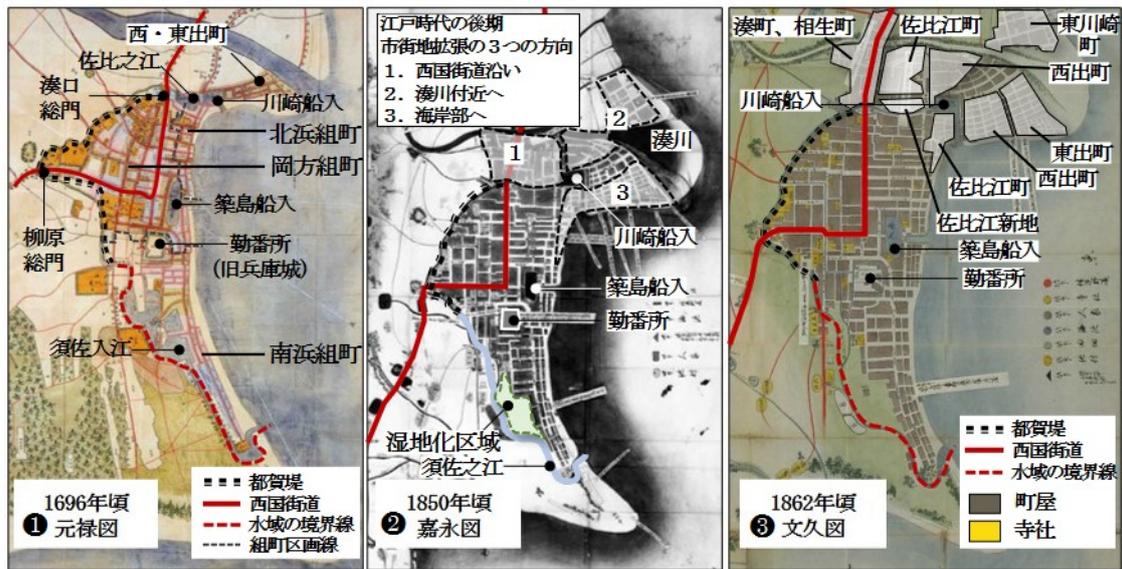


図2 古地図からみる江戸時代前期から後期までの市街地と空間要素の変化 (図の上側が北)

絵図の出典：図1は表1中の①、図2は表1中の②、図3は表1中の④を参照。

表1 用いた古地図・絵図と読み取られる情報 (筆者作成)

	タイトル	縮尺 単位	所蔵先	表記 範囲	説明・読み取れる情報
古地図・絵図	江戸前期 ① 摂州八部郡福原庄兵庫津絵図 ・絵図 ・兵庫津奉行 ・元禄9 (1696) 年頃	なし	個人蔵・神戸市立博物館寄託	旧湊川～和田岬	1) 兵庫津を描いた現存する最古絵図 2) 正確な縮尺で描かれ、現在の地図と合わせるとほぼ一致する精度を持つ。 3) 兵庫城(陣屋)、西国街道、都賀堤の位置、町々の具体的な分布と町割りの形態を示す。
	江戸後期 ② 津中絵図控 ・絵図 ・大坂町奉行 ・嘉永3 (1850) 年頃	なし	個人蔵	旧湊川～和田岬	・図②～④は兵庫津が幕府領(1769～1867年)の間に作成された同じ形式の絵図。上記の1696元禄図と比較した相違点を以下に記す。 (1) 寺社、町場の分布と名が明記され、赤線で西国街道が表されている。湊川惣門の外側に町場が形成され、西国街道沿いと湊川河口付近耕地の都市化が見られる。 (2) 北浜の町規模が拡大し、北浜海岸部の埋め立ての市街地拡張は読み取れる。 (3) 佐比江が埋め立てられ、新たに佐比江新地の創出が見られる。 (4) 湊川を越えて新たに東川崎町が創出されたことが見られる。
	江戸後期 ③ 兵庫津絵図 ・絵図 ・大坂町奉行 ・安政6～文久2年 (1859～62) 頃	なし	/	旧湊川～和田岬	
	江戸後期 ④ 兵庫津之図 ・絵図 ・大坂町奉行 ・文久2 (1862) 年頃	なし	早稲田大学図書館	旧湊川～和田岬	
	江戸時代後期 ⑤ 兵庫津町之図 ・絵図 ・江戸時代後期	なし	神戸市立中央図書館 貴重資料デジタルアーカイブ	須佐の江水域とその周り	・図⑤は、江戸時代後期に兵庫津の南浜の西側にあった「須佐入江」を図示し、それぞれの間数を注記していることから判断するに、その様相に主題をおいて描かれた絵図と思われる。入江に草木のようなものが描かれていると考えられ、同地において土砂が堆積し湿地化が進んでいたものと考えられる。

拡張の影響で、湊川の物的境界と湊口総門の入り口を超えた範囲にまちの領域が拡大していることがわかる。

②中心：元禄期のまちの中心(核)(勤番所)と中心部(岡方)という位置づけは1862年頃までに受け継がれている。

③軸：西国街道沿いの宿とした交通に適した都市機能を重視すること<sup>注20)</sup>により、勤番所(兵庫城)に向かう軸が強調され、城下町としての南北方向の西国街道の都市軸(縦軸)という重要な位置づけが図られる。一方、海岸部の市街化の影響で、西国街道(南北)沿いから、港町としての海・築島舟入江に向かう東西方向の道路の軸(横軸)という機能も強化された。1862年頃のまちは、縦軸(城下町)・横軸(港町)という二つの町が重ね合わされた形で構成されている。

### 3. 兵庫のまちの解体・再構成

次に、まちの構成要素を捉え、近世の原型から現在の都市空間までの段階的変遷を踏まえ、まちの領域的視点から兵庫津を基盤とするまちの解体・再構成について分析・考察する。

明治期の市街地整備事業は「新道開削・地域更正事業」<sup>注21)</sup>と称せられる。兵庫地域では、神戸港の後背地とみる考えなど、県庁と中心機能の東側への移転に伴い、都心は兵庫から神戸へ発展の重心が移動していく<sup>注22)</sup>。

ここでは、小原啓司の神戸市における明治期の市街地整備に関する土木史研究と「新修神戸市史 行政編Ⅲ 都市の整備」の明治期から昭和期まで都市整備の概要<sup>注23)</sup>、兵庫港の修築に関する研究<sup>注24)</sup>を踏まえて述べる。

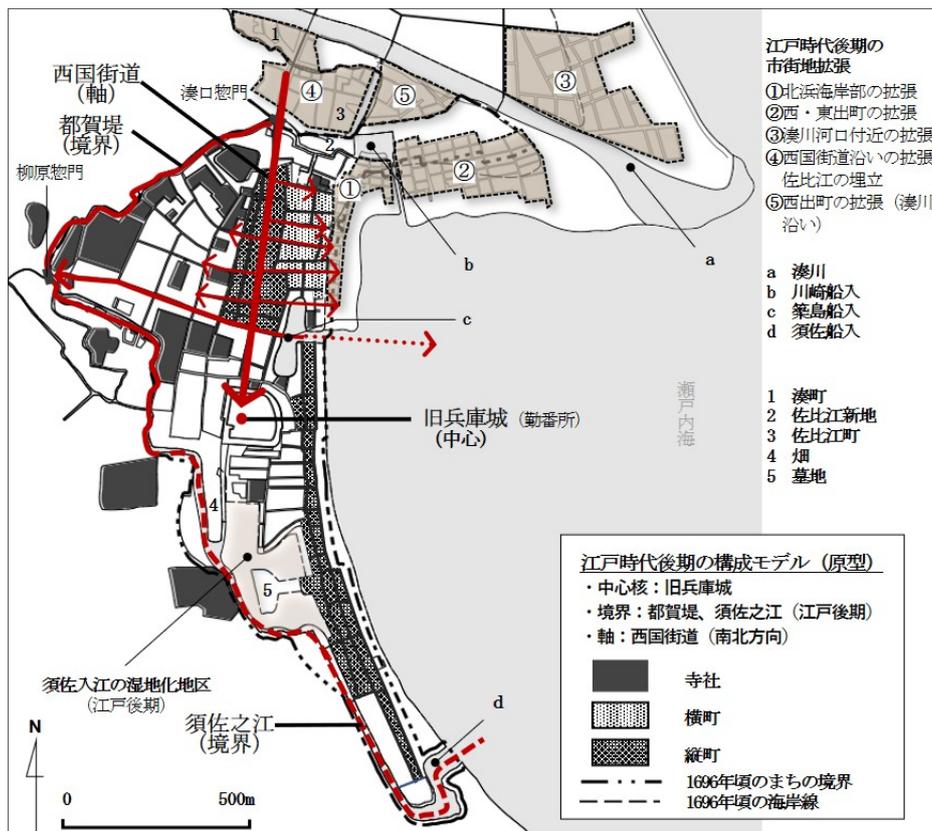


図3 1862年頃の兵庫のまちの構成モデル

注：第42次・52次「報告書」の「元禄兵庫津復元図」をベースに、江戸後期の古地図により読み取られる情報を踏まえ、明治10年兵庫・神戸市街之図と現在の神戸市地籍図を参照してCADソフトで作成

### 3.1 新川運河開削・地域産業化によるまちの解体

#### 1) 新川運河開削、湊川付替と新市街の開拓

明治期の兵庫港では、適当な船舶の避難所がなく、和田岬の迂回には不便が多く、県当局は運河を開削し小船を迂回せぬに兵庫港に入れるように兵庫運河を計画した<sup>注25)</sup>。

新川運河（1877年）の開削によって造船や卸売り、倉庫業が集積し、兵庫のまちは徐々に工業地帯へと変貌を遂げていった。1899年に和田岬支線と兵庫運河本線の完成とともに、運河沿線の土地を工場、倉庫の立地に適するように改良し、地域の工業化が促進されていた。

また、旧湊川は土砂流出、氾濫と東西交通の障害問題があるため新湊川に付け替えられ、1901年に旧湊川の河川堤防を削り、在来の兵庫津との間の三角地帯に新市街として整備された。

地域の西側では、新道開削・地域更正事業の実施とともに新しく開削される新湊川を西側の境界とし、4つの「工区」（西尻池村工区、東尻池1・2・3工区）と三菱造船所を含む森田地域の市街地が形成された（図4）。

図4のように、新湊川、兵庫運河本線・支線、荻藻島運河の周辺地域（森田地域）において、都市空間は江戸時代の港町から次第に工業化地帯へとその位置づけが変わっていく傾向が見られる。

#### 2) 旧兵庫津の解体

明治開港から戦後の1950年代までの都市整備による影響から、兵庫のまちの境界、拠点、軸などの変化について以

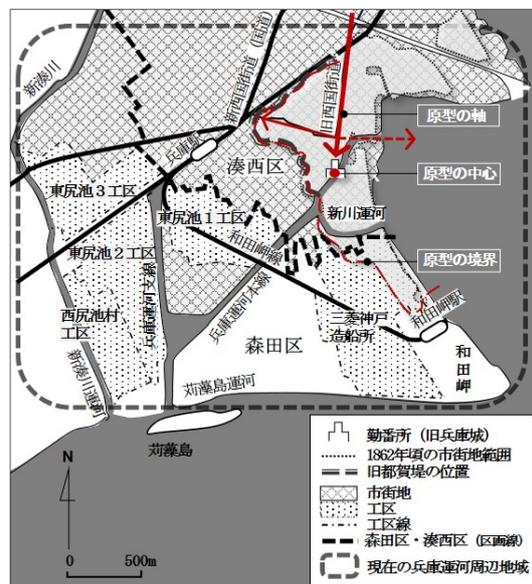


図4 1910年代の兵庫運河及び周辺地域の都市整備

注1：1933年に兵庫区と改称された前、現在の和岬地域と旧兵庫津のうち湊川以西の区域は「森田区」、「湊西区」と呼ぶ

注2：各「工区」の位置は小原啓司の「明治期の神戸における市街地整備の事業手法の研究(参考文献7)」、「明治42年神戸市略図」を参照して筆者作成

下で整理した。

①境界：外郭としての都賀堤は削平事業<sup>注26)</sup>、兵庫駅（1889年）・和田岬駅（1890年）と神戸駅間の鉄道開通に伴い、江戸時代の物理的境界が見えなくなる。また、当時のまちは旧兵庫津の境界を超えて周りに整然とした市街地を拡張して、旧市街地の衰退化も一時見られた。

②中心（核）・拠点施設：1877年の新川運河の開削によって、江戸時代のまちな勤番所と築島船入などの拠点施設が消失した。

③まちな軸：旧西国街道の付け替えとともに、交通量が少なくなり、江戸時代の中心軸としての位置づけが消えてしまったといえる。

1945年行政区の再編により、湊区・湊東区の一部・森田区の兵庫運河以東が兵庫区に編入された。当時の兵庫の市街地拡張は、現在の兵庫運河周辺地域と和田岬地域の基盤をつくりあげたといえる。

図5は江戸時代末期から1980年代までのまちな解体と再構成について表したものである。この図5①から②への変化に示すように、1945年代の兵庫のまちは、工業地帯（森田地区）と新・旧市街地（湊西区）を区画し、運河、鉄道

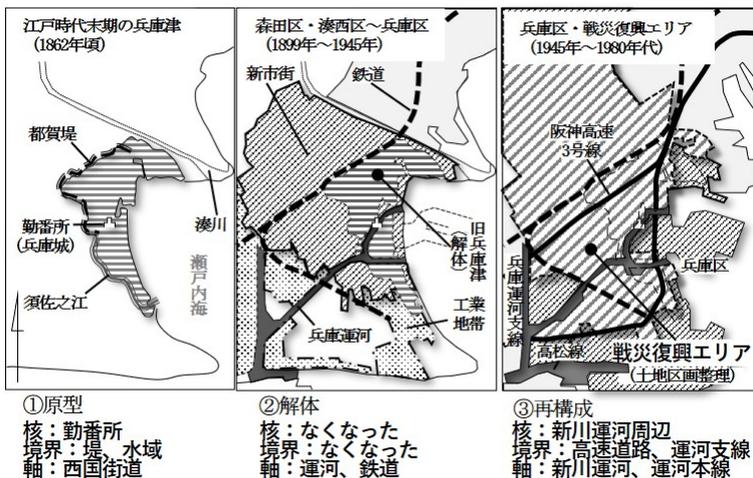
と高速道路が市街地を分断し、また、旧兵庫のまち以東の新市街と神戸市の東部の神戸港への依存が高まるにつれ、県庁の移転とともに、まちなまとまりが欠けて解体された状態といえる。

### 3.2 戦災復興事業を契機とするまちな再構成

1945年3月・6月の大空襲によって、当時の兵庫区・森田区・湊東区の市街地が壊滅的被害を受け、旧まちな骨格はほぼ消えてしまったといえる。同年12月に策定された「戦災地復興都市計画基本方針」<sup>注27)</sup>に基づき、神戸市は土地区画整理をはじめとする復興事業が着手されることになる。

図6は兵庫区において、1949年から1989年まで実施された土地区画整理事業により影響を受けたエリアと1990年代以降の浜山地区の土地区画整理のエリア<sup>注29)</sup>を示す。

図5の③に示すように、戦災復興事業により1980年代の兵庫では、旧兵庫津の解体から、近代工業地帯への変貌を経由し、阪神高速・高松線・兵庫運河支線で新たに境界がつくれ、新しい兵庫のまちな領域を維持するまちな骨格が再構成されていることが窺える。

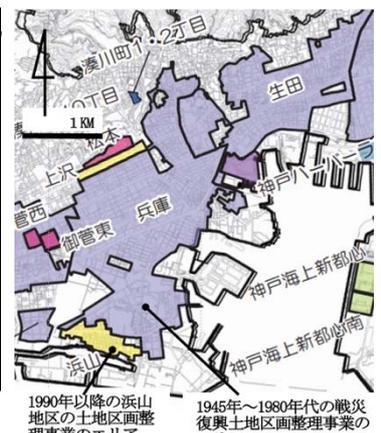


①原型  
核：勤番所  
境界：堤、水域  
軸：西国街道

②解体  
核：なくなった  
境界：なくなった  
軸：運河、鉄道

③再構成  
核：新川運河周辺  
境界：高速道路、運河支線  
軸：新川運河、運河本線

図5 まちな解体と再構成における領域の構成の変化（江戸時代末期～1980年代）  
（参考文献13）16）、17）、神戸の土地区画整理事業区域一覧図及び神戸市における土地区画整理事業一覧<sup>注28)</sup>より筆者作成



1990年以降の浜山地区の土地区画整理事業のエリア  
1945年～1980年代の戦災復興土地区画整理事業のエリア

図6 1980年代までの戦災復興土地区画整理事業と1990年代以降の浜山地区の土地区画整理事業のエリア（神戸市における土地区画整理事業一覧を参照し、神戸の土地区画整理事業区域一覧図<sup>注28)</sup>に筆者加筆

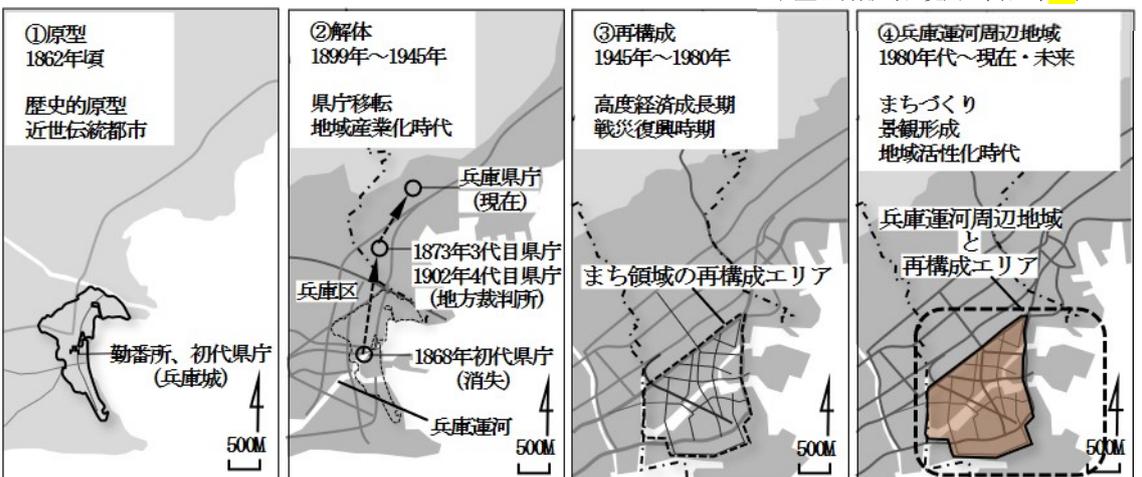


図7 兵庫のまちな構成する領域の解体・再構成からみるまちな時代区分（筆者作成）

### 3.3 1980年代以降の空間要素の変化

1970年代からのインナーシティ現象に対して、80年代以降のインナーシティ再生と浜山地区の木造密集市街地のまちづくり・土地区画整理事業が行われ、地域で生活幹線道路（高松線）と地下鉄海岸線の整備が行われた。

また、兵庫運河以南の現御崎公園では、戦前は鐘淵紡績工場があったが空襲被害により損壊され、1969年に跡地に神戸市立中央球技場が建設され、2002年ワールドカップの開催にあわせて4万人規模の収容力を有するスタジアムとして改築される。2001年に地下鉄海岸線の供用開始に伴い、それは地域での重要な拠点施設となっている。

### 3.4 まちの領域の解体・再構成による時代区分

江戸時代後期の原型的モデルと、現在の都市空間との関係からみると、1862年頃のまち構成において、多くの町名と寺院、一部の伝統的町割りの形態、旧西国街道、主要な街路（現在市内との接続する街路）などの歴史的な文脈がみえるが、まちの構成モデルからみると、境界（外輪堤、須佐之江）と中心（旧兵庫城）、旧西国街道の軸としての中心機能という基本的構成モデルはすでに崩れてしまったといえる。しかし、領域的視点からみると、時代が変わると、扱われるまちの領域範囲も変わる。「兵庫」のアイデンティティを意味するまちの領域と構成モデルは、近代以降の兵庫運河開削と地域産業化、戦災復興計画事業によって市街地が再編成され、新しい境界や中心（拠点施設）、軸の構築によるまちの領域を再構成することができる。

2章と本章より、兵庫運河周辺地域における時代区分として、図7に示すように、領域的視点から、①江戸時代の近世、②明治から終戦（1945年）の近代、③戦後から戦災復興事業が終わる1980年代まで、④戦災復興事業後からの現代の4つに設定できる。

## 4. 兵庫運河周辺地域における重層するまちの骨格

現在の兵庫運河周辺地域では、江戸時代後期、近代の工業化時代、戦後から80年代に形成された骨格が積み重ねられた上で、新しい兵庫のまちという領域と空間秩序が形成されている。そのため、本章では江戸時代の兵庫津を基盤としつつも各時代の層が重ねられた現代の兵庫運河周辺地域のまちの骨格と構成モデルを分析・考察していく。

### 4.1 3つの時代の重ね合わせとしての現代兵庫

2008年に兵庫運河が国土交通省による「運河の魅力再発見プロジェクト」<sup>注30)</sup>の認定を受け、兵庫運河およびその周辺地域のまちづくりの方向性をとりまとめた「兵庫運河周辺地域の活性化に関する提案」が2009年に発表された。さらに、近世の兵庫城・勤番所跡地周辺は、市営地下鉄海岸線「中央市場前」駅周辺のエリアとして、大型商業施設の建設、兵庫運河の水際空間と一体的に整備されつつある。さらに、2019年に兵庫県が策定した県立兵庫津ミュージアム（仮称）基本計画に基づき、兵庫の歴史と魅力の発信施設「県立兵庫津ミュージアム（仮称）」の整備が進められている<sup>注31)</sup>。

1980年代以降の現代までの3つの層のまちの骨格をそれぞれ、近世・江戸時代の図3、近代の図8-1、戦後から1980

年代の図8-2、図8-3、それらの重ね合わせとしての1980年代から現代を図8-4で表している。それぞれの時代ごとのまちの骨格と現代の兵庫運河周辺地域の関係について以下に述べていく。

#### 1) 第1層：近世（原型）の系（図3）

南北方向の西国街道は現在の一般道（交通量は比較的小さい）になり、東西方向は現在の幹線道路になる。外郭・境界としての外輪堤は消えて、その位置に現在の旧国鉄鉄道路線（山陽本線・JR神戸線）が建設された。

江戸時代の城（中心・象徴）、築島船入江（拠点施設）、東西の惣門（入り口）は新川運河開削と市街地拡張によって消えてしまった。現在、西出・東出・東川崎地区の一部（図8-2）と多くの寺院は、戦災や阪神淡路大震災による被害を乗り越え、その密集する木造長屋と狭い道路幅の空間秩序が残されている。

そのなかに、1995年阪神・淡路大震災との後の震災復興まちづくり、西出・東出・東川崎地区のまちづくり、みなとの歴史をいかす「兵庫津の道」の設定と浜山地区などの住民参加のまちづくりが進められてきた。

1862年頃の兵庫の原型モデル（図3）からみると、残されている旧西国街道（南北方向）を中心軸とし、現在中之島的大型商業施設イオンモール・駅前広場、現在進められつつある兵庫津ミュージアム（仮称）の新たな中心拠点に向かう関係という城下町の伝統的空間秩序がみえる。

#### 2) 第2層：近代（解体・戦災）の系（図8-2、図8-3）

兵庫運河開削・湊川付替により地域の境界が広がり、中心の勤番所が消失した。これらと戦災による面的な被害により近世の原型としての旧兵庫津の解体が進んだ。

図8-1に示すように、明治以降から1945年大空襲を受ける前の地域では、生産・交通の効率を重視し、市街地を貫く鉄道や幹線道路、産業道路が地域全体に引かれる。

しかし、空襲後の兵庫区は東川崎町から和田岬まで広範囲に爆撃され、西・東出町以外の多くの市街地が焦土と化した。当時の兵庫は連続的連なる家屋が焼失されて残っておらず、空中写真（図8-2）では空襲前の幹線道路の痕跡しか見られない。

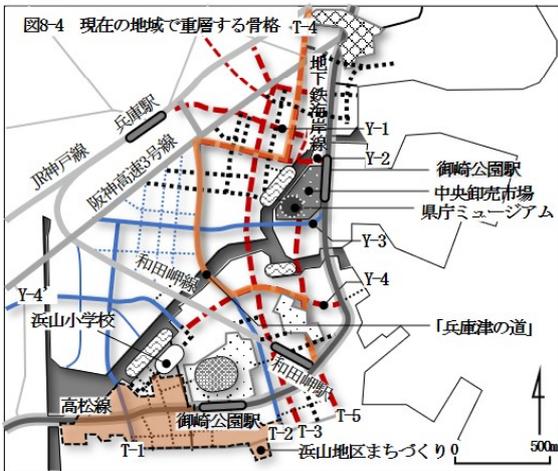
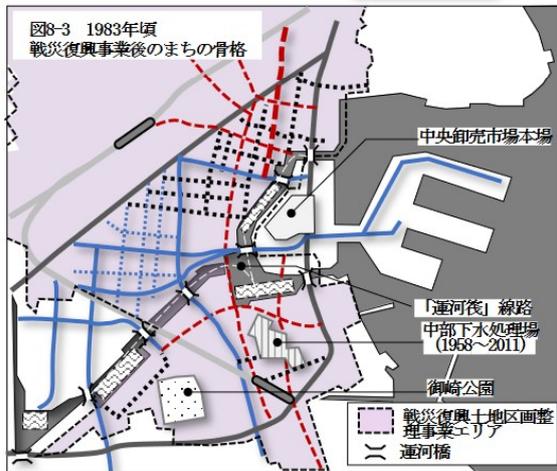
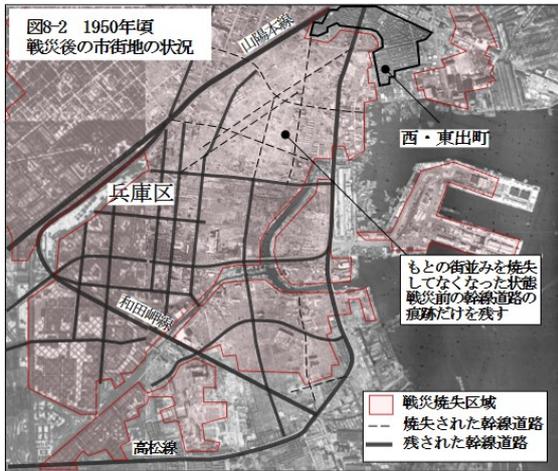
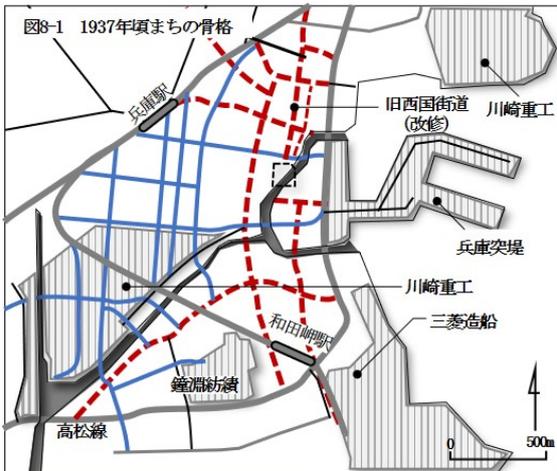
現在の地域では、近代から受け継がれている骨格は主要な産業専道路（図8-2中の残された幹線道路）と和田岬線、高松線である。また、運河・道路を核とした工業時代の文脈と土地利用形態が現在まで受け継がれていることが図られる。

#### 3) 第3層：現代（80年代の領域の再構成）の系（図8-3）

ここでは、「神戸の土地区画整理事業のあゆみ」などに記された内容<sup>注32)</sup>を踏まえ、戦後から1980年代までの戦災復興事業により形成された境界・軸・中心と、現在の地域との関係について述べる。

①拡張された領域的範囲：江戸時代の旧都賀堤は北側の阪神高速3号線（1966～1980年代）になり、須佐之江の水域が消えて西側の兵庫運河支線（1899年）は新たな境界になる。また、まちの南部は新市街の拡張と高松線（1928年）の建設に伴い、新しい物理的境界が再構成され、まちの領域は近世原型と比べて拡張している。

②中心・拠点施設：江戸時代の兵庫城・勤番所という中



T-1: 浜中線	Y-1: 西国街道	— 鉄道・高速道路	■ 駅	■ 貯水場
T-2: 住吉橋線	Y-2: 会下山線	— 幹線道路、産業専用道路	□ 兵庫城の位置	■ ウォーターフロント整備
T-3: 古湊線	Y-3: 松原線・兵庫埠頭線	- - 継承された近世の道路	■ 継承された近世の町割り	■ 現代商業施設
T-4: 西国街道	Y-4: 川中御崎線	●●● 戦災復興事業の整備 A	■ 工場、下水処理場	■ スタジアム
T-5: 道名なし	Y-4': 尻池橋から材木橋まで	●●● 戦災復興事業の整備 B (近代からの骨格)	■ 大型公園、広場	

注: Yは横軸の道路、Tは縦軸の道路  
\*下線つければ江戸時代の路名

図8 各時代のまちの骨格の変化と空間要素の積み重ね  
注: 神戸市文書館により1937年神戸市実測図(1:5000)と国土地理院神戸市航空写真(1945年~1983年)、「戦災概況図・神戸」をあわせて、神戸市都市計画情報HPにより白地図・道路整備状況図・用途地域・都市施設をもとに作成

心核の代わりに、戦後、神戸市中央卸売市場本場が建設され、現代に受け継がれていく地域の中心・拠点施設のもととなった。

③横軸・縦軸と水路：戦後から1980年代までの交通システムは、近代の産業道路をベースに、5つの南北方向の縦軸(T-1浜中線、T-2住吉橋線、T-3古湊線、T-4西国街道、T-5道名なし)と4つの東西方向の横軸(Y-1旧西国道路、Y-2会下山線、Y-3松原線、Y-4川中御崎線)の幹線道路で構成される。

また、現在の浜山小学校前と新川運河の多くの水域では、当時は貯水水面として港湾活動が行われていた。1980年代の兵庫運河では、築島橋、新川橋、御崎橋の間に朝夕の通勤客を運んでいる「運河筏」<sup>注32)</sup>がいきかい活気をみせる水路がある。(図8-3)

4) 三つの時代の重ね合わせとしての現在兵庫(図8-4)  
2008年以降の兵庫運河周辺地域は、原形としての近世基

盤の近世の層(江戸時代)、近代工業地域の展開を支えた近代の層(明治期~終戦)、戦災復興の開発による現代のまちの再構成の層(戦後~1980年代)、の三つの層で積み重ねられるまちの特性をあらわしている。

#### 4.2 変化するまちの構成モデルとその特徴

兵庫のまちの変遷に伴い、空間構成に関する境界、中心、軸、都市空間のまとまりの変化および運河の機能転換を捉え、まちの構成モデルを前章で設定できた時代区分に合わせて図9に示した。上段のA~Dは各時代区分の構成モデル、下段はその時代区分に合わせたまちの領域を地図に現したものである。以下に、各時代区分の構成モデルについて、上記の点より説明する。

図9中のAは近世後期・江戸時代の構成モデルである。都賀堤と須佐入江などの水域を境界、旧兵庫城に位置する勤番所を中心(核)、西国街道を軸とした近世の原型的モデルとなっている。

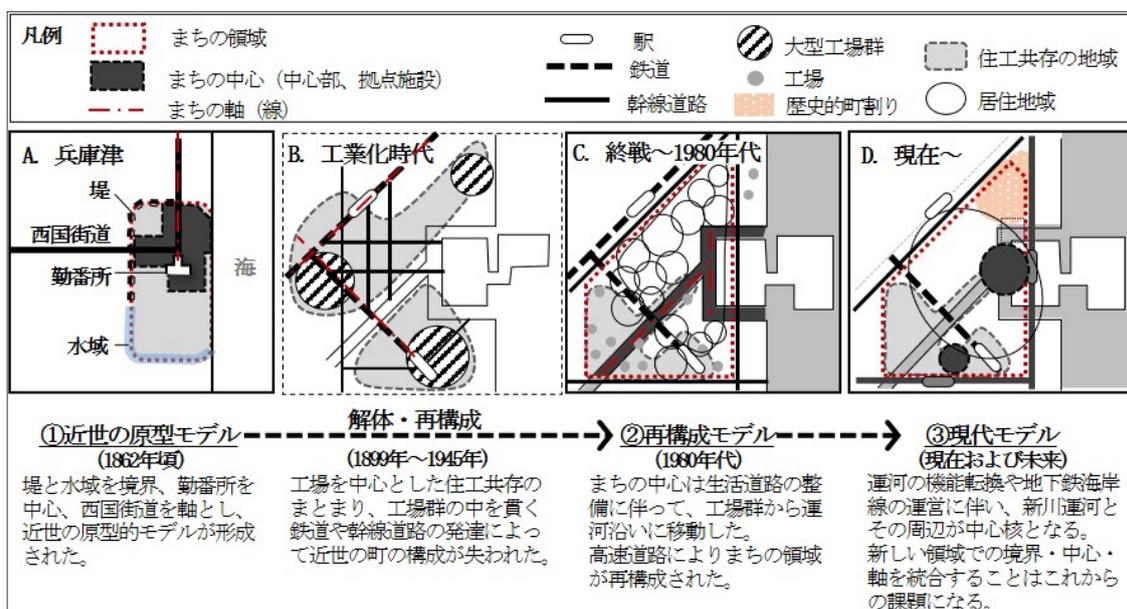


図9 変化するまちの構成モデルとその特徴 (筆者作成)

図9中のBは明治開港から1945年の終戦までの構成モデルである。当時の兵庫は、川崎重工 (1910年) と三菱造船所 (1905年) の発足から、工場地帯の中を貫く鉄道と幹線道路の発達によってまちの骨格が潰されている。

図9中のCは1980年までの構成モデルである。1980年の市街地において生活環境の整備をめざし、1950年代以前の工業化・スプロール化の防止を図るため、住宅・都市整備公団 (現在の都市再生機構) の開発事業の施行がスタートし、生活空間と住工共存のまとまりの基本形態が形成された。工場群と住宅地の共存の場、水上の運河筏交通は当時の生活空間の構成の特徴である。

図9中のDは、1980年代から現在にかけての運河の機能転換を捉えたまちの構成モデルである。兵庫運河は各時代の歴史的背景によって変遷している。明治初期の海運交通施設、その後地域産業化により貯木場という産業機能になって、2004年以降の景観法の実施に伴い、地域環境快適空間と現在の景観形成地域になる。

2005年以降の様々なまちづくりの活動や景観施設整備 (チャンネル・プロムナード整備、レクリエーションの場として、レガッタ、真珠貝プロジェクトなど) の実施とともに、運河という水域環境は兵庫運河周辺地域でまちの構成を組み立てる中心軸として位置づけられると言える。

図9に示すように、各年代の構成モデルとその特徴により、兵庫のまちについて、①近世の原型モデル (1862年頃)、②近代化による原型モデルの解体 (明治～終戦)、③再構成モデル (1945年～1980年代)、④現代モデル (1980年代～現在) という4つの時代区分とそれに対応した4つの構成モデルの変化を解説することができる。

まちの現代モデル (図9中のD) では、運河の機能転換や地下鉄海岸線の運営に伴い、新川運河とその周辺が中心部となる。しかし、その兵庫を意味する新しいエリアで、まちの領域・中心・軸を空間的に統合することや点在する地域資源のまとまりはこれからの課題になる。

## 5. まとめ

本研究は、伊藤毅の「領域」的視点から、都市形成に関わる歴史・土木・考古学などの既往研究を踏まえ、兵庫のまちを捉える領域の段階的に変遷してきた過程を考察・分析したことにより、以下の知見を整理した。

まず、考古学調査と古地図・絵図の整理から、近世兵庫津の原型としての構成モデルを明らかにし、その中には、境界 (外輪堤、須佐入江)・軸 (西国街道)・中心 (兵庫城) という要素の変化と、寺社、横町・縦町の分布により、1862年頃の兵庫のまちの原型的構成モデルを明らかにした。

次に、兵庫津を基盤とした兵庫運河周辺地域で、近代の工業化による解体、そして戦後復興と現代都市計画・整備によって縦軸・横軸の骨格という変容の過程を考察し、まちの全体を捉え、構成モデルとその特徴を、①近世 (1862年頃) の原型、②近代工業化によるまちの解体とその地域産業を支える骨格モデル、③戦後から1980年代の戦後復興事業が行われた時期の交通骨格によるまちの再構成モデル、④1980年代から現在の地域活性化時期という4つの時代区分を明らかにした。

最後は、現在の兵庫運河周辺地域において、現代も含めた4つの時代の重ね合わせのまちの骨格を分析し、近世から現在まで兵庫のまちの4つの構成モデルの変化とその特徴を明らかにした。

現在の地域で各時代の豊かな空間資源に溢れ、兵庫のまちを捉える領域・エリアの明確化は、近世・近代・現代の3つの時代的背景と建設の歴史が積み重ねられた空間特徴があると考え、兵庫のまちのアイデンティティを維持・再生するために、都市計画やまちづくりに対する重要な価値を持つと筆者は考える。

## 注釈

- 1) 本稿では、「兵庫」の範囲を現在の行政上の兵庫区の範囲ではなく、江戸時代の兵庫津を中核としながら拡大した湊川以西の市街地全体を指している。したがって、兵庫の個性や地域アイデンティティを支える重要なまち、行政区画の範囲を超えて歴史的原形から近現代都市化に至るまでの領域や形態の変容を捉える視点で研究を進める。
- 2) 江戸時代の「兵庫津」とは、町部と田園部に分かれ、町部を「地子方(ぢしかた)」田園部を「地方(ぢかた)」と呼んでいた。地子方はさらに岡方・北浜・南浜の三方(みかた)に分かれ、岡方は浜に接しない町々を総称していた。本稿で取り扱う「兵庫のまち」あるいは「兵庫」は、兵庫の市街地いわゆる「地子方」である。
- 3) 神戸市では、近代開港初期において市中央部と外国人居留地の一連的な都市開発整備事業によって、1889年の市町村制施行以前の神戸は「兵庫・神戸」という2つの核を含む都市構造を持つ。次の都心の東への移動とともに、都市の原点としての「兵庫」は、港湾機能の喪失と工業地帯へと変貌する近代都市計画に従って地位が凋落し、自らの歴史的文脈とそのもつ地域アイデンティティの継承・再興、地域活性化が現代に神戸市の都市計画とまちづくりの課題となる。兵庫地域に関する歴史性と地域性の検討は、参考文献17) 18) の内容を参照した。
- 4) 参考文献1)
- 5) 参考資料2)
- 6) 参考文献 19) 20) 21) に関する内容を踏まえて整理した。ここでは、江戸時代のまちの姿を明らかにするため、兵庫津遺跡発掘調査の第2次～62次の報告書を調べ、以下の関連内容を参照にした。江戸時代の兵庫津復元図に関して：参考文献19) のp.38と参考文献20) のp.5「元禄期兵庫津復元図」  
城下町の整備に関して：参考文献21) のp.11「兵庫津遺跡関連年表(14世紀以降)」
- 7) 参考文献3)
- 8) 参考文献4)
- 9) 参考文献5) 6)
- 10) 兵庫津・神戸村の人口変動は、参考文献18) p.114表3兵庫津の町・家・人口の変遷より人口を引用。
- 11) 兵庫津文化財範囲は、神戸市の埋蔵文化財ホームページにより、遺跡地図に現れた「包蔵地」である。  
神戸市の埋蔵文化財HP>遺跡分布図  
URL: <http://www.maibun-kobe.net/mapn.htm>  
(参照 2019-12-02)
- 12) 神戸市のDID(2015年)は国土交通省・国土地理HPの情報による以下のURLを参照。  
地理院ホーム>地図・空中写真・地理調査>人口集中地区(DID)平成27年  
URL: <https://www.gsi.go.jp/chizu/joho/h27did.html>  
(参照 2020-09-02)
- 13) 本稿で参考した古地図・絵図リストを表1に示す。
- 14) 本稿で使用した「実測図」は神戸市文書館所蔵の近代神戸市実測図明治10・14年のS=1:5000、S=1:25000を複写した。(入手 2018-09)
- 15) 参考文献13)～16) 参照
- 16) 神戸市白地図は、以下の国土交通省・国土地理HPを参照。  
URL: <https://www.gsi.go.jp/> (参照 2020-09-02)
- 17) ここでは、矢守一彦「城下町プランにおける「近世」」(参考文献12)の分類によれば、江戸時代の兵庫津の空間構成については、武家地・町人地・寺社地の居住区分、内郭・外郭の都市境界、主要な街道筋の構成・関係により、兵庫城に向かう方向の西国街道を中央軸とし、勤番所を中心核とし、都賀堤・須佐之江で囲まれた「城下町」である。
- 18) 参考文献12)より、「縦町」は大手通り＝城下町を貫く主要な街道筋や目抜き通り、「横町」は大手通り＝主要な街道筋や目抜き通りと交わる道筋である。
- 19) ここでは、「近世兵庫津の都市空間」シリーズ講義(高久智広、2007年12月)に公開された内容により、「安政6年浜先復元図」と都市機能の細分化に関して論拠をあわせて参考した。  
URL: <http://www.pa.kkr.mlit.go.jp/kobeport/pdf/news/event/20071223.pdf> (参照 2020-09-01)
- 20) 「西国街道沿いの宿とした交通に適した都市機能」という記述の論拠は、兵庫区役所により発行された「尼崎藩領時代の兵庫」(p.1、参考文献22)の「はじめに」を参考した。  
神戸市HP > 区役所 > 兵庫区 > 区の紹介 > パンフレット  
URL: <https://www.city.kobe.lg.jp/documents/19768/amagasaki.pdf> (参照 2020-09-02)
- 21) 参考文献7)
- 22) 参考文献10)
- 23) 神戸市明治以降の都市計画は二つの段階で分けられる。第二の段階は明治10年代後半以降、違位置の拡大に対して行政の側が一定の計画性を与えようとし始める段階であった。(出典：参考文献14)、p.25)
- 24) 参考文献10)
- 25) 新川運河の開削に関する事情は、神戸市史資料室・陸井敏子「兵庫運河」(参考文献22)により整理した。
- 26) 都賀堤は、兵庫のまちでは湊川が氾濫することを恐れてまちを取り囲むように築いたが、後に付近の町民が勝手にその土を採ったり、開拓をしたりするものがでてきたので、1873年頃には全く堤防の用途を失い、むしろ交通を阻害するに過ぎなくなっていたものである。(参考文献7)
- 27) 「過大都市の抑制及び地方中小都市の振興」を基本方針とし、土地利用や地域地区、公園緑地などについての計画標準を示した。全国の被災地はこの方針に従って復興計画を策定している。
- 28) 神戸市HPの都市局の計画事業等、土地区画整理事業のページに掲載されている「神戸の土地区画整理事業区域一覧図」及び「神戸市における土地区画整理事業一覧」を参照した。後者からどの土地区画整理事業が戦災復興事業かどうか分かる。URLは以下。  
土地区画整理事業のページURL  
<https://www.city.kobe.lg.jp/a13150/shise/kekaku/jutakutoshikyoku/adjustment/index.html>  
神戸の土地区画整理事業区域一覧図のページURL  
<https://www.city.kobe.lg.jp/documents/14946/koubenototikukakuseiri/jigyoutiranzen.pdf>  
神戸市における土地区画整理事業一覧のページURL  
[https://www.city.kobe.lg.jp/documents/14946/kobe\\_kukakuseiri.pdf](https://www.city.kobe.lg.jp/documents/14946/kobe_kukakuseiri.pdf)

- 29) 戦災復興で区画整理が実施された区域では、「神戸市の土地区画整理事業一覧」から、復興計画事業による影響を与えてきたエリアが確認できる。
- 30) 「運河の魅力再発見プロジェクト」に関する情報は国土交通省・港湾の報道発表資料による以下のURLを参照。  
国土交通省HP>政策・仕事>港湾>運河の魅力再発見プロジェクト  
URL:<https://www.mlit.go.jp/kowan/unga/unga.html> (参照 2020-09-02)
- 31) 兵庫県HPの「兵庫津ミュージアム(仮称)の整備に取り組んでいます」参照。URLは以下。  
<https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk47/hyogonotsu-museum.html> (参照 2021-03-21)
- 32) 「神戸の土地区画整理事業のあゆみ」により、11地区の土地区画整理事業と58本の幹線道路の整備事業を行って、現在の兵庫運河周辺地域の基本的な都市形態が構成されている。  
同資料は、神戸市HPの土地区画整理事業のページ内に以下のURLで掲載されている。  
URL:[https://www.city.kobe.lg.jp/documents/14946/ayumi\\_1.pdf](https://www.city.kobe.lg.jp/documents/14946/ayumi_1.pdf)
- 33) 1980年代の運河筏は以下の資料で参照する。  
・参考文献22)  
・筏やランチが行きかい活気をみせる運河(出典:「神戸新聞」昭和46年1月5日より31日、同5月4日より28日連載の「兵庫運河」、入手:神戸市文書館 2018-10)
- 12) 矢守一彦:「城下町プランにおける「近世」-とくに町割りにおける「堅」と「横」について。」講座日本の封建都市3, pp.144-169, 1981
- 13) 新修神戸市史編集委員会:新修神戸市史 歴史編III 近世、神戸市、1989
- 14) 新修神戸市史編集委員会:新修神戸市史 歴史編IV 近代・現代、神戸市、1994
- 15) 新修神戸市史編集委員会:新修神戸市史 産業経済編II 第二次産業、神戸市、2000年
- 16) 新修神戸市史編集委員会:新修神戸市史 行政編III 都市の整備、神戸市、2005年
- 17) 神戸市兵庫区まちづくり推進部まちづくり課:近代土木遺産兵庫運河、神戸市兵庫区役所、2011
- 18) 神戸市立博物館編、特別展「よみがえる兵庫津—港湾都市の命脈をたどる」、神戸市立博物館、2004
- 19) 神戸市教育委員会:兵庫津遺跡 第42次発掘調査報告書、神戸市教育委員会文化財課、2008  
URL:<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/22896> (参照 2019-10)
- 20) 神戸市教育委員会:兵庫津遺跡 第52次発掘調査報告書、2011  
URL:<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/11090> (参照 2019-10)
- 21) 全国遺跡報告総覧:神戸市教育委員会、兵庫津遺跡第62次発掘調査報告書、2017  
URL:<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/23121> (参照 2019-10)
- 22) 陸井敏子:『兵庫運河』、市民のグラフ こうべ No.90、神戸市、1980

#### 参考文献

- 1) 伊藤毅:領域史への視点、領域史の方法、日本建築学会、建築雑誌 2015年5月号、pp.3-4、2015
- 2) 佐藤滋・街区環境研究会:現代に生きるまち—東京のまちの過去・未来を読み取る、彰国社、1990
- 3) 中江研・瀬川瑞:和田岬のまちなみの形成、新修神戸市史編集委員会、新修神戸市史 生活文化編、pp.91-139、2020
- 4) 中西智哉・足立裕司:近代における兵庫港とその周辺の都市形成に関する研究、日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系、pp.837-840、2009
- 5) 漆野茉莉子・足立裕司:近代における神戸港及びその後背地の形成に関する研究、日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系、pp.749-752、2008
- 6) 吉原大志:近代神戸と兵庫運河、神戸大学文学部海港都市研究センター、海港都市研究<特集 海港都市国際学術シンポジウム 東アジアの海洋文化の発展—国際的ネットワークと社会変動>、pp.59-71、2011
- 7) 小原啓司:明治期の神戸における市街地整備の事業手法の研究、土木学会、土木史研究、17号、pp.69-80、1997
- 8) 小原啓司:明治期の神戸における市街地整備手法の成立に至る考察、土木学会、土木史研究、18号、pp.81-91、1998
- 9) 小原啓司:明治期の神戸における市街地整備手法の事業手法と現行法制との対比についての考察、土木学会、土木史研究、19号、pp.41-52、1999
- 10) 稲見悦治:港都神戸の都市化と海岸線の変遷、歴史地理学会、歴史地理学紀要、第2巻、pp.155-176、1960
- 11) 藤本利治:神戸市の都心とその変遷、人文地理学会、人文地理、1(2)、pp.63-67、1948